

チームビルディング最終報告

3月に入り、卒団式目の今、チームビルディングの最終報告をさせていただきます。
今回百舌鳥FCAチームは中央リーグ準優勝という結果を残し、約20年ぶりの結果を出すことができました。しかし、そんな結果を上回るほど素晴らしい成長を日々遂げてくれました。それが百舌鳥FCの最大の財産になったと私は考えています。

百舌鳥FC Aチームのチームビルディングは順風満帆とは行きませんでした、それでも予想を大きく上回るチームへと成長を遂げてくれました。

それまでのチームの歩みとチームビルディングの成果をここに最終報告させていただきます。

主な試合スケジュール

10/30中央リーグ最終戦 11/12中央杯 11/19トレマ加賀田SC戦 11/23秋季大会
12/3、12/4ミズノ杯

①10/1 中央リーグ日置西戦以降

前回の途中経過報告で10/1 中央リーグ日置西戦でチームはノーミングの段階へと入り、スタイルを確立しようとしていました。しかし、その後10/16エイトカップ予選リーグ敗退も強豪柏田SC相手に引き分け、セレッソ大阪U-11相手に敗北を喫すも、内容のある試合をするようになってきました。しかし、強豪との差はなかなか埋まらず、勝ちきれないまま10/30中央リーグ最終戦を迎えました。この日の試合では白鷺SC戦で5-1と勝利し、その後の三国ヶ丘戦では引き分けPK負けとなりました。三国ヶ丘戦では内容はそこまで悪くなかったものの引き分けてしまい、PK負けという悔しい状況の中、果たして本当に強くなっているのか？と思える内容で、チームで築いてきた自信が揺らぎ始めた時だったのかもしれないと今は思います。

その後の中央杯では怪我人が数人いたこともありましたが思ったほど成績が振るわず、迎えた11/19トレマ加賀田SC戦では危惧していたことが的中し、チームの脆さを完全に露呈した内容でした。加賀田SCはかなりの強豪で百舌鳥FCは初対戦でした。とても基礎技術が高いチームであり、最も少ない手数でこちらの守備組織を崩して得点していききました。

久々の完敗に私自身かなりのショックを受けました。これまでの強豪よりもう一段階強い相手でもそこそこはやれる自信があったのに完璧に叩きのめされました。

その試合の後、高学年コーチでかなり深く話し合いをしました。そして抜本的な戦い方の変更の必要性に気付きその後、チームはフォーメーションを変更し、2-4-1から3-3-1へ挑戦することになりました。

ここではフォーメーション変更の理由は省きますが、フォーメーションとは選手の配置であり、その配置から戦術（戦い方）を組んでいくのでそれぞれの選手の役割が変わってきます。つまり、一から戦い方を変えるという方法を選びました。

その後の11/23・27秋季大会、12/4ミズノ杯大会では2-4-1を主軸としながら試合の序盤やトレーニングマッチでは3-3-1を試していききました。

なかなかうまくいかない状況は以前のストーミングに戻ったような感覚でした。

しかし、選手達はその新しい戦い方に苛立ちながらも真摯に向き合って戦ってくれました。

特に秋季大会でのカップ戦初の決勝リーグ進出は選手の想いが乗っていたからこそ成せた成績だと思います。更なる伸び代を感じながらも強豪チーム揃いのミズノ杯ではやはり加賀田SC戦と同じく圧倒され、結果が出ず、2-4-1フォーメーションの限界を感じた日となりました。こうしてまた、チームは新たなストーミングへと入って行きました。

②12/14トレーニングマッチNAGASAKA.FC戦

この日の試合も新しいフォーメーションで戦いましたが、1試合目はほとんどボールを持たず、相手に圧倒されて点差を広げられる展開のまま試合終了となりました。

今までの鬱憤がさらに溜まるような内容が続き、選手達もかなりのストレスを感じていました。なぜうまくいかないのか？前はもっと戦えていたのに？前のフォーメーションの方がいいのではありませんか？俺はやっているのに。まさにストーミング状態でした。

コーチもこういう思いがあることには気づいていましたが、それでも更なる上を目指すためには3-3-1のフォーメーションでの戦い方が必要であることを説明し、修正を繰り返していました。チームビルディングとしても元に戻ろうとするのではなく、問題の本質と向き合い、解決していくことが必要となります。

（実際はその事を本で学んでいても元のフォーメーションに戻そうかと何度も考えました。）

そして、1試合目の反省をコーチが話した後にこそ、このチーム最大のターニングポイントがありました。それは、選手が自主的に話し合いを始めた事です。

今まではコーチからの発信で選手に自主的に話し合うように仕向けたり、コーチを含めて全員で話し合ったりは何度もしてきました。

しかしこの日は違って、こちらから何もせずとも、キャプテン副キャプテンを中心に自然とボードの前に人が集まり、声を掛け合い、すべて選手達が自主的に作戦を立て、決まりを作っていました。

この行動こそがチームビルディングでストーミングを乗り越えるのに最も必要なことであり、「チームのことが他人事から自分事」へとさらに変化した証であると思います。

そして、それぞれの選手の動きや役割、ゲームの流れの中での作戦を立てたりすることが「行動規範（スタイル）を作る」こととなり、チームビルディングのノーミングに入り、急成長を遂げました。

そしてNAGASAKA.FCとの第2戦目では、1試合目が嘘のように自分達がボールを支配し、相手を自陣まで押し込むことに成功し、2得点を挙げ無失点完封勝利。今まで噛み合わなかった歯車が完璧に噛み合った試合内容でした。

選手達が自主的に話し合ったことにより新たな行動規範(スタイル)を確立する事に成功しました。この戦い方こそ百舌鳥FCAチームが目指していたものであり、一時はノーミングへと足をかけましたが、戦い方の限界から再びストーミングへ入ることとなりました。そして選手達は自主的に話し合い、行動規範を作り直すことで再びノーミングへ入り、トランスフォーミングへと進む足がかりとなりました。

今回対戦したNAGASAKA.FCは以前にもトレーニングマッチを組ませてもらった相手ですが、その時も完封負けでした。もちろん個々の技術力は言うまでもなく高い相手です。その相手にチーム力で差をつけての勝利は最も価値のある勝利と言えます。

正直百舌鳥FCAチームは他のチームに比べて技術力の平均値は基本的には劣っています。ですが、そんな相手と肩を並べられるチームになったということはどのチームよりもチーム力が勝っていたからに他なりません。

③12/14トレーニングマッチNAGASAKA.FC戦～現在へ

その後チームは結果として目標とする優勝には届かなかったものの、今まで勝てなかった強豪相手に沢山の勝ち星を重ねることができ、快進撃と言ってもいいほどの内容でした。

下津池JSC（2nd）、RIP ACE SAKAI、新金岡JSC、光竜寺Jrキッカーズ、御池台FC、アーバンベガサスFC等、数々の強豪との戦いを制し、「強いチームに勝つ」という目標は達成することができました。

そもそも技術力や個々の能力の平均値は高い相手ばかりの中、全ての試合で接戦を繰り広げています。今まで縁のなかった予選リーグの突破も何度も果たしてきました。そしてなにより、どんな相手にもワンサイドゲームでやられる事は無く、それどころか逆転するゲームをしたりと観ていてドキドキワクワクさせる試合をするようになりました。

私自身ハーフタイムに選手達に出す指示は減り、ポジションの確認や集中を切らさないように盛り上げるのみでほぼ観客と変わらない状態へと変わっていきました。

選手達も前回の途中経過報告で挙げた『アシスト力』をどんどん発揮してくれました。

プレーの面でも昔なら完全に役割が分業されてる印象だったプレーから

(1)ボールを保持する役割だった選手が前にボールを運んだり、鋭い縦パスする場面

(2)守備的な選手が攻撃参加

(3)攻撃の選手が守備を助ける

(4)パスのサポート、守備のサポートの意識の向上

などが挙げられます。

こういったプレーが増えることで相手チームからすると「まさか」が起こり、予測しにくい動きとなります。しかし、チームではその「まさか」はすでに構築された行動規範（スタイル）があるからこそ、驚きではなく気が利いたプレーとなり、チームが一つの生き物のように連動しているような瞬間が生まれるのです。そんな瞬間はやはり観ていても楽しいし、やっている選手達も楽しいのだと思います。そんな瞬間に出会えるのがこのサッカーという競技の醍醐味だとも思います。そして何より、試合をしていて最も嬉しいことは応援に来てくれている保護者の皆さんの声がベンチに聞こえるようになってきたことです。

直近ではthree百舌鳥大会、中百舌鳥大会と全ての試合でドキドキワクワクさせる魅力的な試合をする選手達に応援の声や悲鳴、歓声上がるようになり、試合をしていて本当に楽しくなってきました。コーチの私でも「もっとすごいことをしてやろう！」「もっといいプレーを引き出して楽しませてやろう！」と考えるようになりました。私ですらそうなのだから選手はもっと楽しんでいただろうと思います。

これこそ、前回の途中経過報告でも挙げていた『第三者の評価を得る』ということができたのだと思います。だからこそ選手達は自分達の行動規範（スタイル）に自信を持つことができ、さらに良いプレーが生まれるという好循環を起こすことができました。

緊張感あふれる試合の中、歓声に呼応する選手達、一喜一憂するサポーター。そんなプロの監督にでもなったかのような光景を間近で体感した私が一番楽しませてもらったのかもしれない。そう錯覚する状態はもうトランスフォーミングしたチームなんだと私は思いました。

まとめ

今回チームビルディングを完遂して思うことは、選手達が自主的に話し合った瞬間に出会えたことがコーチとして本当に幸せな瞬間だったと思います。

正直他のチームはここまで選手に好き放題にフォーメーションを変えさせたりしないですし、選手がここまで考えたりもしていないと思います。選手がこんなに自主的にボードの前に集まるチームは見たことがないですし、選手同士の関係性もクラブチームでは百舌鳥FCのように仲が良さそうなチームは見たことがないです。

そしてそれは他チーム同士の戦いの審判をしているとそれは本当によくみえてきます。選手がどうするか、正解が限定されるサッカー、つまり、チームの型が存在するサッカーです。しかもその型が少なければ少ないチームほどロースコアで終わります。なぜなら動きが読みやすいからです。相手の動きが読みやすいサッカーをしているうちはそうそう逆転劇も起こりませんし、ハラハラドキドキワクワクするようなサッカーは生まれないと思います。(一般的に言われる強いチームはその型の種類が多いというチームが多い)その点うちは小さな小さな地域クラブです。みんなが毎日顔を合わす友達同士の環境の中でサッカーができる。会いたい時にいつでも会える距離にいる友達同士のチームだからこそ、チーム力を上げる源があったのだと思います。3、4年の頃はケンカや言い合い、揉め事もたくさんありました。だからこそ相手のことを理解するチャンスに恵まれたのだと思います。

今回行ったチームビルディングは百舌鳥という豊かな土壌と選手という優れた種が元々あり、そこに水を与えただけに過ぎないのです。

百舌鳥FCのサッカーはそんな選手達の絆があってこそそのサッカーだから美しく楽しいのだと思います。そして最後には強さも加わりました。

結局最後は全て自主的に選手が考えて走るサッカーだったからこそ型に嵌らないサッカーで相手を翻弄し、逆転したり、ハラハラドキドキワクワクする試合をする。(たまによくわからない負け方もしますが笑) そんな彼らのサッカーの方が私は大好きです。

もちろんコーチとしてサッカーの原則は教えたが、型に嵌め込むことは一切していないとの自負があります。

チームの型に嵌め込むのではなくチームの型を選手達で作る自立したサッカー。これが百舌鳥FCの強さと魅力だと思います。

そして卒業する選手達にはこれからの人生も型に嵌る力より、型を作れる自立した人になって欲しいと願っています。

最後に

こんなにも楽しいサッカーが出来たこと、選手達と素晴らしいチームを作れたことは私の誇りです。そして、サッカー経験のない私に大切な子ども達を預けて下さり、熱い信頼を寄せてくださった保護者の皆様には感謝しかありません。

百舌鳥FC Aチームを率いるにあたり、技術的な面ではやはり他チームに劣る部分はあります。それはコーチが選手としても上手い人であればその技術を教える術はもっとあったのかもしれませんが。その術を持たない私が主に指導に当たらせてもらい、ただただ感謝しかありません。私が指導にあたった約3年間、こんな私を信頼してくださって本当にありがとうございました。

これにてチームビルディング最終報告とさせていただきます。

百舌鳥FC Aチーム担当コーチ 江村 友太